



# 魔法の 発生



川崎ゆきお

人にはお伽噺が必要だ。現実にはあり得ないような。実際に起こるような話ではなく、空想の扉を次々と開けていくような。これは架空の想像上の物語であり、見る側も決して現実のものとは思っていない。ただ、それを見るのは一人だけで、それを想像した人だけ。これは人に聞かす話ではなく、常に隠されている。奥深くに。

「お伽噺ねえ」

「最近リアルな話ばかりなのでね。それだけじゃ味気ない。まあ、現実が吹っ飛んでいるような話はしらせるがね。あり得ないんだから、聞いても仕方がない。人の妄想を聞いているようなものだから」

「でも必要なんでしょ」

「個人的にね」

「どんな」

「それはあまりにも稚拙すぎて、人には言えない」

「幼稚な話なんですか」

「自分が思いついた話なので、都合のいいように作られているんだが、そうもいかないことがある。嘘の話でも、どこか現実と繋がっていて、身動きが取れないこともある」

「身動きですか？」

「話がそこで止まってしまう」

「お伽噺なんだから、何とでもなるでしょ」

「できれば魔法のようなものは使いたくない」

「そのとき偶然とか」

「話の持って行き方が魔法なんだ。話の中の魔法ではなくね」

「それが、どうして必要なのですか」

「もう一つの世界が必要なんだ」

「絶対に？」

「必須ではないけど、できれば、あった方がいいってことかな。しかし、それを忘れてしまうことがある」

「お伽噺を」

「どんどんリアルになっていって、お伽噺じゃなくなっていく」

「あり得ないことを想像しても仕方がないですから、それでふつうでしょ」

「そうなんだけど、それじゃふつうの話になる。現実のね。これはなるようにしかならない」

「お伽噺なら、ならないこともなるんでしょ」

「なるように扉を開けていく。これなんだ」

「現実の扉じゃなく、架空の」

「そうそう」

「でも現実には役立たないでしょ」

「不思議と連動している」

「オカルト？」

「お伽噺の展開がすらすらいくときは、現実の話もすらすらいく」

「それは、呪術に近いです。因果関係がないんだから」

「個人の中ではある」

「現実と空想がごっちゃになった人がいるけど。それに近いんじゃないですか」

「それは使い方が下手なんだ。お伽噺は黙して語らず、漏らしてはいけないし、その気配さえも見せてはいけない。現実の話の中にお伽噺を入れてはいけないんだ」

「ふーん、よく分からないけど、変なことやってますねえ」

「ところが、さっきも言ったように、そのお伽噺を最近やらなくなり、現実の話ばかりになってしまっただけ」

「で、どんなお伽噺なんですか」

「黙して語らずだ」

「相変わらずもったいぶった言い方ですねえ」

「そうだなあ、お伽噺が裏で流れていることを言ってしまったのが失敗だった」

「油断？」

「そうそう。まあ、中身を言わなけりゃ、いいんだ」

「そのお伽噺が、魔法なんですね」

「さあ」

「それが呪文なんだ」

「さあ、どうかな。それは君もやっているよ。無意識のうちに」

「はあ」

了